あま市民病院をより知っていただくために…

喉頭がん

耳鼻咽喉科

耳鼻咽喉科の「がん」には、喉頭がん、上顎がん、舌がん、上咽頭がんなどが挙げられます。そのうち今回は、喉頭がんについて述べてみます。

喉頭がんは、その大部分が扁平上皮がんと呼ばれる組織型を示し、男女比は、約10対1と圧倒的に男性に多く見られます。喫煙も一つの誘因と考えられています。その侵される部位によって声門上がん、声門がん、声門下がんに分けられます。また、その進行の程度により、頸部のリンパ節や他の臓器への転移が認められることもあります。

症状は、声門がんでは、早くから嗄声（声がれ）が起こることが多いので、早期に発見されることが多く、また、治癒率も高いのが特徴です。しかし、声門上がんでは症状が表れることが遅く、嗄声や呼吸困難などの症状はかなり遅れて表れるので、発見が遅れることも多く、また頸部のリンパ節への転移も起こしやすいのです。声門下がんは症状的には声門がんとよく似ていますが、進行した場合、呼吸困難も伴ってきます。

治療は、放射線療法、化学療法、手術療法などがありますが、初期のものはほとんどの場合は放射線療法のみで「治癒」にまで持っていくことができます。手術療法となれば、多くの場合「咽頭摘出術」によって声を失うことになります。したがって、大切なことは、どこの「がん」でも言えることですが、早期発見です。

それでは、喉頭がんを早期に発見するためにはどうしたらよいでしょうか。嗄声は、風邪などでのどを痛めたときにももちろん起こる症状ですが、長く続いたときは要注意です。また、がんにはなっていませんが、広い意味での前がん状態として、声帯白板症や角化症などの病態もあります。したがって、1カ月以上、嗄声やのどのつかえ感などが続いているときは、耳鼻咽喉科を受診するようにしてください。

喉頭がんは、がんの中でもかなり予後の良いがんに属するもので、早く見つければほとんど治るがんであることを念頭に置き、怖がらずに早めに受診しましょう。

問い合わせ先
あま市民病院
〒490-1111
あま市甚目寺字山ノ浦148番地
・問い合わせ時間
午前8時30分～午後5時15分
※土日・祝日を除く
☎（444）0050
HP FAX（444）0064
http://www.city-ama-hosp.jp/

今月の記念日

「2月28日はビスケットの日」

1855年（安政2年）の2月28日付の書簡にビスケットの製法が書かれていた史実にもとづき、社団法人全国ビスケット協会が制定しました。

それまで長崎周辺で外国人向けにだけ作られていたビスケット。この書簡は、「保存のきく食糧」という点に着目し製法を調べていた水戸藩の蘭医・柴田方庵が、長崎留学中にオランダ人から学んだビスケットの作り方を手紙にし、水戸藩にあてて送ったものでした。同協会ではビスケットの日に向けて、ビスケットの需要拡大を図るビスケットまつりキャンペーンなどを実施しています。

ビスケットの語源はラテン語の「ビス・コクトゥス」で、ビス（二度）、コクトゥス（焼かれたもの）、つまり、「二度焼かれたもの」という意味です。人類がパンを作り始めた約1万年前。当時、旅するときの食糧として、日持ちをよくするためにパンを乾かしてもう一度焼いたものを持って出かけたそうです。これがビスケットの起源ではないかといわれています。

ビスケット類にはさまざまな種類があります。火ぶくれができないようガス抜きの針穴があり、パリッとした歯ざわりが特徴の「ハードビスケット」、砂糖や油脂が多めで、柔らかくサクサクした歯ざわりの「ソフトビスケット（クッキー）」などが代表的ですが、そのほか、軽い口あたりの「クラッカー」、保存食に便利な「乾パン」、強力小麦粉を使って副原料の少ない生地をスティック状に押し出して成型した「プレッツェル」、生地と油脂を交互に幾重にも折りたたんだ「パイ」などもおなじみです。

加工品などを含め、これらビスケット類の生産量は年間約24万3千トン（平成21年・農林水産省調べ）。金額にして、約2千3百億円が生産されています。